

平安宮内裏内郭廻廊跡の発掘調査

調査期間：令和3年 9月3日（金）～ 10月6日（水）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

平安宮は平安京の北部中央に位置する宮殿です。宮内には政治と祭事の中心地である大極殿院、元旦節会などの饗宴の場である豊楽殿院、天皇の居住空間である内裏、そしてそれらを支える様々な実務官司の庁舎が置かれていました。このように平安宮は政治・外交の中心地であるとともに、最高権力者の住居でもありました。残念ながら都市化が進んだ現在では、平安宮を偲ぶ場所はほとんど残されていません。ただし、内裏跡や豊楽院跡などは史跡指定され、さらに史跡範囲外においても積極的に遺構の保存を計っています。今回、内裏内郭廻廊推定地で建物建設が計画されたため、廻廊に関連する遺構の状況を把握するための発掘調査を地権者の御協力を得て実施しました（図1）。

2 内裏とその後

内裏は平安宮の中央やや東寄りに位置します。その構造は「内裏図」（陽明文庫蔵）によれば、外郭築地（堀）と内郭廻廊（廊下）の二重構造で区画され、内郭には天皇の日常の政務や公的儀式を行う紫宸殿や『源氏物語』に登場する弘徽殿などの殿舎がありました（図2）。

平安京遷都（794）とともに創建された内裏は、天徳4年（960）に初めて火事により焼失しました。その後、再建と焼失を18回繰り返し、天皇が徐々に内裏を利用しなくなり、安貞1年（1227）を最後に再建されなくなりました。ただし、平安宮内は儀式の場として室町時代まで利用され続けていたようで、限られた施設が建ち並ぶ「内野」と呼ばれる空間が広がっていました。しかし、文禄4年（1586）、豊臣秀吉が、「内野」の一角に聚楽第を築城すると周囲に大名屋敷などが造られます。その後の徳川政権下には、西国支配の拠点として

京都所司代が置かれました。内裏の跡地には下屋敷がつくれ、さらに「内野」の開発が進んだようです。

3 今回の発掘調査成果

調査地が内郭南面廻廊推定地にあたることから、廻廊基壇や石組み雨落溝などの検出が予想されました。しかし、これらの遺構は「土取穴」によって破壊されていました。調査地一帯には、京壁や茶室などの上質な壁の材料として使用される黄褐色の「聚楽土」が広く分布しています。「聚楽土」は売買の対象であったことから、江戸時代以降になると広範囲に渡って土取りが行われました。今回の調査でも西端の僅かな範囲に取り残された「聚楽土」を確認することができました（図3）。

では、土取りはいつ頃に行われたのでしょうか。今回の調査では土取穴を覆う整地土やゴミ捨て穴から江戸時代前半～明治時代にかけての遺物が出土しました。これらは、京都所司代下屋敷時代に廃棄されたものと考えられます。一方、2区の「土取穴」を埋め戻した土からは平安時代の瓦や皿のみが出土しました。なかには、内裏の火事を想起させる焼けた建築部材（凝灰岩）もありました。このようなことから、少なくとも2区の土取は下屋敷が成立するよりも古い時期（平安時代～近世）に行われ、当該地周辺の土で埋め戻された可能性があります。先述した通り、中世には大切な儀式の場でもあり、土取りが行われたとは考えにくく、平安時代もしくは京都所司代が成立する直前の可能性が高いと言えます。これまで平安宮跡一帯の土取りは、「内野」の開発が進む近世以降に行われていたと考えられていましたが、近年の調査成果によって平安時代にも土取りが行われたことが明らかにされつつあります。冒頭でも述べた通り、内裏などの多くの建物が火災と再建を繰り返しており、再建事

業に必要となった土を宮内で採取した可能性が考えられています。今回の土取りの詳細な時期は、「土取穴」から出土した遺物を丹念に検討することにより明らかになります。

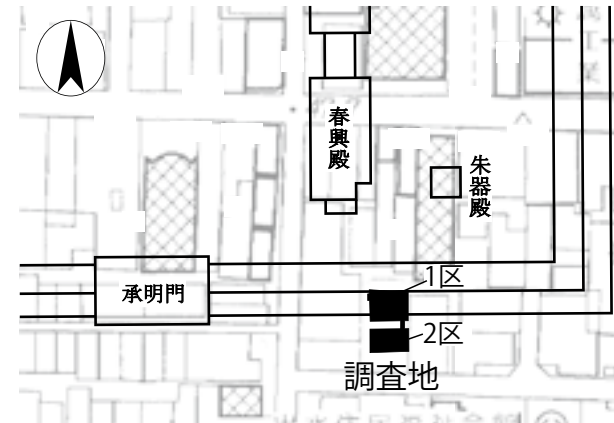


図1 調査地位置図

当該地周辺の土取りの変遷は、平安宮の造営から修理、そして都市としての開発を示す、重要な資料です。長らく首都であった京都の都市史を考える上で非常に重要なことです。（鈴木久史）

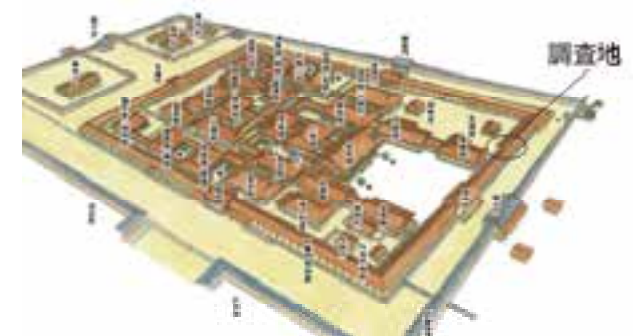


図2 内裏復元図（作画：梶川敏夫氏）



図3 1区全景（東から）



図4 2区全景（東から）